重い決断 ケアが大事

迫る2025ショック 6

7部 胃ろうの選択

胃ろうのチューブを交換後、内視鏡で胃の中を点検する赤羽重樹医師＝横浜市神奈川区

9日夕方、横浜市のマンション。西神奈川ヘルスケアクリニック院長の赤羽重樹医師(52)は、男性患者(66)宅で胃ろうのチューブを交換していた。「胃の中はきれいだね」。内視鏡でのぞきながら、妻(65)に声をかけた。

赤羽医師は、胃ろうや摂食・嚥下（のみ込み）に詳しい在宅医として、訪問診療をこなす。患者や連携する看護師らの信頼は厚い。横浜市内の在宅医らでつくる「在宅医ネットよこはま」（岡田孝弘代表）の東部地区代表も務め、胃ろうなどに関するシンポジウムを開くなどしてきた。

そんな赤羽医師だが、胃ろうについては、ある「トラウマ」がある。病院勤務医だった2000年前後、毎年50～80件の胃ろう手術を手がけていた。数年後、その患者たちの生命予後を調べようと、約200人に電話をかけた。すると、数人の家族から「何で胃ろうをつくる前に、こんな大変な状況になると説明しなかったんだ！」と怒られた。

「転院先を3カ月ごとに自分で探し続けた」「介護施設には『胃ろうの人は入れない』と断られた」――。当時は、今より病院や施設の支援態勢が弱く、「胃ろう難民」が出ていた。

「自分は多くの患者さんを救ってきた」と思っていた赤羽医師は、大きな衝撃を受けた。胃ろう難民のことも知らなかった。同時に罪悪感が膨らんでいった。

「これからは胃ろうにした後のサポートをしていこう」。そう考え、07年に今のクリニックを開業した。

「自分としては、懺悔のつもりで今の仕事をしているんです」

在宅医療の現場に入り、患者により深く関われるようになった。胃ろうの管理で困ったことに相談に乗るだけでなく、つくろうかどうか迷う人の支援もする。

胃ろうにするかどうかは、①夫婦・親子間の愛情②経済力③空間的なゆとり（家の造り）――などを元に助言するという。「自分だったら、どうする？」と聞くことも多い。「母親に胃ろうをつくって」という息子がいた。「自分だったら、どうしますか？」と聞くと、「つけません」。

「本当にお母さんのことを考えるなら、『自分だったら』の選択の方が、思いやりなのではありませんか」と赤羽医師が言った。もう一度考え、結局胃ろうにはしなかった。

赤羽医師は、今まで多くの「胃ろうの選択」に立ち会ってきた。わかったことは、「胃ろうはつくってもつくらなくても、必ず後悔は残る」ということだ。つくると「自分が罪悪感から逃れるためにやった」と思い、つくらないと「死期を早めてしまった」などの思いを抱いてしまう。

だからこそ、亡くなった後のケアが大事だという。連載に登場した大垣進さん（昨年4月に82歳で死去）の妻、佐智子さんは今も月1回、健康チェックのため赤羽医師の元を訪れると、当時の思い出話をする。

胃ろうの選択は、重い。でも、こうした心のケアや周囲の支えがあれば、和らげることができる。

＝おわり

（この連載は佐藤陽が担当しました）

◇

口から食べられなくなった患者への栄養士や看護師らの支援をとり上げる「8部 口から食べたい」は、10月に掲載予定です。

「団塊の世代」が75歳以上になり、医療・介護の提供体制が追いつかなくなる「2025年問題」について考える企画を続けています。記事に関する感想や、介護・在宅医療などのご体験、ご意見を募集します。「介護職員や看護師の現場での悩み」「うちの自治会では、こんな先進的な取り組みをしている」「近所にこんな元気老人がいる」といった情報や、この企画で採り上げてほしいテーマを募集します。朝日新聞横浜総局「2025年問題取材班」あてに、ご連絡先を明記のうえ、郵送かファクス、メールでお願いします。

元気なうちに考え 家族に意思を

まず、重たい決断や葛藤をお話し下さった方々に、深く感謝したいと思います。2025年に向け、こうした選択を迫られる人たちは増えていきます。「自分なら、どうするだろうか」――。元気なうちに、ある程度のシミュレーションをし、家族に意思を伝えておくことはできます。今回の連載が、そんなお役に立てれば幸いです。